

明日 への 話題

IOT考察



インターネットイニシアティブ
代表取締役社長

かつ 栄二 郎
勝 栄二郎

どこにでも持ち運び可能なコンピュータであるスマートフォンのグローバルな普及。ビッグデータの解析力。クラウドコンピューティング技術の向上や人工知能の出現。

これらにより、収集、蓄積、交換、分析されるデータ量が日々、膨張を続ける。人と人、人と物、物と物がインターネットでつながり、あらゆる事象がネット上で構築される時代を迎えつつある。このような傾向をいかに評価するか、見方が分かれるところである。

最近、接した書物を通じて、二つの異なる評価を紹介したい。この見解の違いは今後の経済、産業、生活の変化をどう見るかにも大きな影響を与えるだけに、興味深い。

まず米ノースウエスタン大学のロバート・ゴードン教授は「The Rise and Fall of American Growth」で、1870年から1970年にかけて生産性の急上昇をもたらしたイノベーションの集積は、人類史上で一度限りしか得られない果実だったと指摘する。

それまでは上下水道が完備されず、道路に馬の死体や糞尿が積み上がり、住居環境や食糧事情も極めて非衛生的で、日常生活で娯楽を享受する方法も余裕もなかった。19世紀後半から電気、電話、ラジオ、テレビ、生活インフラ、自動車、飛行機などの発明の連続で、産業も生活も劇的に変わった。今日の高度な生活様式の土台はこの時代に築かれた。

これに対し、IT（情報技術）による第三次産業革命は情報通信とエンターテインメントの分野に限られる、とゴードン教授は言う。TFP（全要素生産性）上昇への寄与も限定的で、かつてのような画期的なイノベーションはもはや望むべくもない、と断じている。

一方、いわゆる「ダボス会議」の主催者として知られる世界経済フォーラム会長のクラウス・シュワブ教授の著書「第四次産業革命」はひと味違う。モバイル、人工知能、ロボット技術、IOT、自動運転車、3Dプリンタ、ナノテクノロジー、バイオテクノロジー等々の出現により、第四次産業革命は線形ではなく、指数関数的に急激に進展するのだと説く。

その影響はあらゆる分野に及び、あらゆるシステムが変容を余儀なくされる。社会の価値観、個人の倫理観にも多大な変化をもたらす。消費者の生活が便利、快適で安上がりになる半面、労働に依存する人々と資本を所有する人々の貧富の差が拡大する。シュワブ教授は、デジタル時代において、多様性と民主主義の根幹である個性を人類はいかに維持していけるのだろうか、と問題を提起する。

バランスのとれた未来はありうるか。我々の生活を見るにつけ、色々と考えさせられる。